宮城学院女子大学後援会会報

MIYAGI GAKUIN SUPPOTERS REPORT 2020 vol.8

新型コロナ禍の 1年を振り返って

宮城学院女子大学
学長 末光 眞希

今から一年前に新型コロナウイルスが中国の武漢で発生した時、封鎖された街の中で作家方方（ファンファン）さんは「武漢日記」を著し、「一つの国家が文明的かどうかを計る尺度はたった一つ。それは、その国の弱者に対する態度なのです」と書きました。

大学も同じだと思いました。コロナ禍に見舞われた昨年の5月3日、本学は「皆さんの大学生活を守るための10の約束」（下記参照）を発表しました。私たちは、遠隔授業へのサポートや図書の郵送サービス、そして困窮学生への経済的支援を約束し、最後に「秋になっても冬になっても入学式を行います」と約束しました。

それは新型コロナに対する戦闘宣言だったと、いま振り返って、思います。世の中にはWithコロナ、ニューノーマルと言った言葉が溢れていました。それは正しいことでした。しかし同時に、これらの言葉が<対面>への取り組みを断念するものであってはならない！と強く思ったのです。大学は他者（ひと）と出会う場所です。人と出会うことを始めから断念したら、そこはもう大学ではない、何より大切なことは、私たちはコロナとの長期戦を戦い続けるために、人と会う必要がある、それほどまでに私たちは弱いのだ―そう思っていました。

前期は遠隔授業となりました。誰に見られることもなくただただ美しく咲き誇るサクラを見て、涙が出ました。新入学生たちはほとんどキャンパスに足を踏み入れることもなく遠隔授業となり、友達さえできない日々が何カ月も続きました。私たちにできることは限られていましたが、フードバンクの食料仕分け作業や食料配布など、一年生に少しでも安全にキャンパスに来てもらえる機会を用意しました。

遠隔授業は送る方も大変なら、受ける方も大変でした。しかし私たちは遠隔の良さを十分に知ることができました。遠隔の方が出席しやすいと感じた学生もいたのでしょう。出席率がアップしました。皆さんは情け容赦なく課せられる課題に悲鳴をあげたことでしょう。しかしそれは必ず皆さんのためになる日が来ると信じています。私は相変わらず、大学には対面が大事と思っていましたが、しかし、では本当に対面でなければできない教学を私たちは提供しているか、とも自問しました。この経験は新年度の授業にきっと活かされることでしょう。

前期の後半あたりから「私たちが今、苦労しながら遠隔授業を行うのは、後期から対面授業を行うための準備なのだ」と気付かされました。コロナ禍の下で安全に対面授業を行うため、入構管理、検温システムの設置、放送部による注意喚起放送、感染対策を考えた時間割、食堂のパネル設置、こうした準備を、遠隔授業を行う傍らで整えて行ったのです。そして前期の遠隔授業の経験は、後期にいつ第二波、第三波が来ても、直ちに遠隔に切り替えられる備えを私たちに与えてくれたのでした。

9月9日～11日の三日をかけ、私たちは入学式を挙行しました。学生と約束したのだから約束を果たすのは当然と思っていました。しかし世の中はそう受け止めませんでした。5カ月遅れの入学式をメディアは大きく報じ、テレビの全国ニュースにもなりました。世の中の反発を覚悟して実施した入学式でしたが、大きな好意を以て受け止められ、報われた思いでした。

こうして後期は対面7割、遠隔3割で授業を開始することができました。入学式や対面主体の後期授業の実施、これらの背景にある思いは、上記のとおりです。しかし、もし、私たちの気が緩み、キャンパス内外で大学関係者がクラスターを発生させれば、これまでの努力はすべて水泡に帰することになります。たいへんありがたいことに、教職員そして学生の皆さんが本当に気を付けて日々を過ごしたお陰で、本学はこれまで、そのような事態を免れてきました。ほぼ毎日のようにPCR検査対象者が出た時期もあったのです。私たちはそのたびに、神様の守りに感謝したことでした。

予想していたこととはいえ、新型コロナとの戦いは長期戦になりました。「一人の退学者も出さない」と言いながら、これを阻もうとする容赦ない現実の厳しさがあります。しかし大学はこれからも新しい支援を考え続けます。学生の皆さんにおかれては、本当に困難なことでしょうが、どうか日々の小さな楽しみを工夫して見つけてください。そして友だちと、先生と、大学とどうか繋がり続けてください。

（大学ホームページより抜粋）

▲フードバンクの食料仕分け作業

▲パネルが設置された食堂

▲入構管理・検温システム

▲入学式挙行風景

新型コロナウイルスの影響で、活動が制限されていますが、皆さんの大学生活を守るための10の約束

A. 入構が禁止されている時でも、

① 皆さんの不安を受け止め、解決できる体制を整備します。
② 遠隔授業に対応できるよう、自宅等での受講環境を整備します。
③ キャリア支援・就職活動をオンラインでサポートします。
④ 学生相談・特別支援・保健センター業務を継続します。
⑤ キャンパスに来られなくても図書館を利用できる制度を整えました。
⑥ 新型コロナウイルス感染症に関連した本学独自の経済的支援を用意します。

B. 入構が可能になった時には、

⑦ 秋になっても、冬になっても、2020年度入学生の入学式を行います。
⑧ 秋になっても、冬になっても、2020年度新入生歓迎行事を行います。
⑨ 前期の分も取り返せるように、サークル活動を充実するようサポートします。
⑩ 例年以上に大学祭を楽しめるように、サポートします。

Campus Report（キャンパス レポート）

2020「大学祭が開催されました」

10月10日（土）・11日（日）の両日、2020大学祭が開催されました。

今年度のテーマは「繋」。コロナ禍の今だからこそ、学生・教職員・地域の方々との「繋」を意識したいという気持ちと、今年度も大学祭を開催して伝統ある大学祭を途切れさせずに「繋」ぎたいという気持ちが込められています。

例年は数千人の来場者を迎えての大規模イベントですが、今年度の開催方法について学生・教職員間で議論を重ねた結果、学生等の健康の確保や感染拡大防止を最優先することとし、残念ながら従来通りの開催方法での実施は断念せざるを得ませんでした。10日は学内者のみでの開催とはなりましたが、対面形式での学生の出展や成果発表の場とすることができました。11日は人気俳優をゲストに迎えての双方向オンラインによるトークショーを開催しました。

大学祭には、大学後援会から助成金のご支援をいただいており、今年度も規模は縮小されたものの無事に開催することができました。この場を借りて御礼申しあげます。

ミツバチ科学研究部門のご紹介

2019年4月、ジャパンローヤルゼリー株式会社の寄附により、本学生活環境科学研究所内に「ミツバチ科学研究部門」が設立されました。この部門は、（1）ミツバチに関する正しい知識を得てもらうこと、（2）ミツバチに興味を持ち携わる人材を育成すること、（3）研究心を醸成する機会を提供することを設置目的としています。

設立以来、ミツバチの生態やハチミツの成分・活用法に関する研究の他、ミツバチの行動やハチミツの分析研究に興味のある高校生を募集した「高校生研究員」の活動、食品栄養学科の卒論ゼミとの連携、森のこども園との連携等、学内外で様々な取り組みを行っています。今年度からは、学生と教職員によるハチミツ事業プロジェクト（仮称）が立ち上げられ、今後の展開が期待されます。

校舎の屋上ではセイヨウミツバチとニホンミツバチが飼育されており、構内の豊かな森や植栽されている植物等から蜜を集めています。採蜜されたハチミツは「MGはちみつ」として、「百花みつ」の他、「さくら」「クローバー・くり」「かえで」「とち・ゆりのき」「秋のはちみつ」等の種類や季節別の商品として各種イベント等で販売されています。保護者の皆様方も、機会がありましたらお手に取っていただけると幸いです。

養蜂スペース

高校生研究員

採蜜見学会

各種ハチミツ製品

クリスマスマーケットでの販売

宮城学院女子大学後援会事務局（大学事務部庶務課内）
〒981-8557 仙台市青葉区桜ケ丘9-1-1
TEL 022-279-4698　FAX 022-279-7566　E-mail syomu@mgu.ac.jp.